一般社団法人日本生態学会
ニュースレター
No.34
2014年9月

［目 次］

第 62 回日本生態学会大会案内 2 1

記事

Ⅰ．書評依頼図書 13

Ⅱ．寄贈図書 13

お知らせ

1．公募 13

書評 14

京都大学生態学研究センターニュース 20

第 62 回日本生態学会大会（鹿児島）案内（第 2 報）

第 62 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ62）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。この案内は、郵送される文書としては最終的なものですが、プログラムの内容などは随時更新されますので、最新情報は大会公式ホームページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/62/）でご確認ください。

連絡先

〒 890-0065　鹿児島市郡元 1-21-35 鹿児島大学理工学研究科（理学系）気付
第 62 回日本生態学会大会（ESJ62）実行委員会
担当：鈴木英治（大会会長）、山本智子（大会実行委員長）
大会公式ホームページ http://www.esj.ne.jp/meeting/62/

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。
大会に関する最新情報は、大会公式ホームページで確認して下さい。

日程・会場

2015 年 3 月 18 日（水）～ 22 日（日）
主会場：鹿児島大学 郡元キャンパス（http://www.kagoshima-u.ac.jp/index.html）
副会場：鹿児島市民文化ホール（http://www.k-kb.or.jp/shibun/）

ESJ62 では、公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭発表・英語口頭発表・ポスター発表）、企画集会、自由集会、高校生ポスター発表、総会、授賞式・受賞講演会、懇親会を行います。主な日程は下記のとおりですが、申込状況によって変更されることがあります。詳細なスケジュールは、プログラムおよび大会公式ホームページで、追ってお知らせします。

3 月 18 日（水）　各種委員会、企画集会、自由集会
3 月 19 日（木）　シンポジウム、企画集会、一般講演（口頭・英語口頭・ポスター）、フォーラム
3 月 20 日（金）　午前　シンポジウム、企画集会、一般講演（口頭・英語口頭）、フォーラム
　　午後　総会、授賞式・受賞講演、懇親会（鹿児島市民文化ホール・鹿児島サンロイヤルホテル）
3 月 21 日（土）　シンポジウム、企画集会、一般講演（口頭・英語口頭・ポスター）、高校生ポスター、フォーラム
3 月 22 日（日）　午前　シンポジウム、企画集会、一般講演（口頭・英語口頭）、フォーラム
　　午後　公開講演会

3 月 20 日午前（鹿児島大学郡元キャンパス）と午後（鹿児島市民文化ホール）の会場は徒歩約 30 分の距離ですが、移動には無料シャトルバスを運行する予定です。詳しくは、プログラムおよび大会公式ホームページで、追ってお知らせします。

提案・申込の締切

・新規に入会する講演者・企画者に関して
講演者・企画者で新規に入会（未納退会で再入会を含む）する方の入会申込　2014 年 10 月 23 日（木）17:00
（入会手続き　http://www.esj.ne.jp/office/member/index.html　を参照）
上記の方の 2015 年学会費入金　2014 年 10 月 23 日（木）入金分

・講演者・企画者に関して
企画集会申し込み　2014 年 11 月 6 日（木）17:00
自由集会申し込み　2014 年 11 月 6 日（木）17:00
一般講演申し込み　2014 年 11 月 6 日（木）17:00
講演要旨登録　　2015 年　2 月 4 日（水）17:00
一般講演口頭発表用ファイルの登録　大会の数日前

・高校生ポスター発表に関して
高校生ポスター発表申し込み　2014 年 10 月 30 日（木）17:00
高校生ポスター講演要旨送付　2015 年　1 月 28 日（水）17:00

※入会申込は随時受付中です。その他の各種申込は、締切の 1 ケ月前程度から受け付ける予定です。
※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。
※すべての締切に関して、**締切後の追加や修正等の依頼には、対応できません。**

諸経費の金額と支払い方法

大会参加費・懇親会費

＜大会参加費＞

2015 年 2 月　4 日（水）まで	：一般	（会員・非会員とも）	8,000 円
	学生	（会員・非会員とも）	5,000 円
2015 年 2 月 28 日（土）まで	：一般	（会員・非会員とも）	9,000 円
	学生	（会員・非会員とも）	5,500 円
大会当日	：一般	（会員・非会員とも）	10,000 円
	学生	（会員・非会員とも）	6,000 円
	学部学生以下	（会員・非会員とも学生証提示・当日受付に限り）	無料

ご注意：大会参加費の前納金額は、期日までに支払手続きを完了した場合に適用されます。2 月 28 日までは、JTB が運営する参加申込・支払いシステム、アマリス（https://amarys-jtb.jp/esj62/）からお支払いください。それ以降は大会会場でお支払いください。

＜懇親会費＞

一般　（会員・非会員とも）　7,000 円
学生　（会員・非会員とも）　4,500 円
懇親会は、事前申し込み（2015 年 2 月 28 日まで）が必要です。

・日本生態学会の会員手続きにおいて「定収入のない若手会員」の大会参加費と懇親会費は「学生」として扱えるよう準備していますので、「定収入のない若手会員（2015 年）」と認められた方はその旨を明記して大会参加申込をしてください。
・キャンセルポリシーに関しては、大会公式ページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/62/）をご覧ください。

学会費

（詳細は　http://www.esj.ne.jp/office/member/guide.html　を参照）

2014 年 10 月 23 日（木）まで：	非会員	2015 年学会費※
	既会員	2014 年学会費（未払いの会員は会員権利が停止します）

※大会のため入会（再入会）される場合は、上記の締切日までに、2015 年からの入会を申し込むとともに、学会費を納めて下さい。
※入会を申し込まれた時点で、2015 年学会費の支払い義務は発生しており、入会の取り消しや学会費の返金はできません。
ご注意：学会費と大会参加費は納入先が異なります。ご注意下さい。

参加・講演申込

・下記の説明をよく読むとともに、下記の大会申し込みチャートを参考にして、申し込みに必要な手続きをしてください。
・講演・企画される方は、大会公式ホームページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/62/）の大会登録システムから発表登録して下さい（参加のみの場合、発表登録は不要です）。発表登録されたデータはプログラムや要旨集の作成に利用されます。
・大会参加申し込み、及び、大会参加費・懇親会費の納入は、JTB アマリス（https://amarys-jtb.jp/esj62/）から行ってください。

一般講演（口頭・ポスター）

・講演者（主たる説明者）になれるのは日本生態学会正会員のみです。既会員の方は、2014 年 10 月 23 日までに 2014 年会費を納入して下さい。また、発表を希望される非会員の方は、下記の入会方法に従って 2014 年 10 月 23 日までに入会し、学会費を納入して下さい
・講演者は、締切までに、大会公式ホームページから発表登録を行ってください。その上で、JTB アマリスより大会参加申し込みと大会参加費の納入をお願いします。
・発表登録時に発行される大会登録番号は、JTB アマリスで行う大会参加申し込み、及び、後日行う要旨の登録

の際に必要となりますので、登録時にご自分で設定するパスワードと合わせて、注意して管理してください。

シンポジウム講演

・大会シンポジウムの講演者は、シンポジウム企画者からの指示に従って手続きを進めてください（大会申し込みチャート参照）。
・大会企画委員会から認められた招聘・招待講演者を除き、申込・発表できるのは、2014 年 10 月 23 日までに会費を納入した正会員のみです。
・大会公式ホームページから発表登録を行い、大会登録番号を取得して下さい。この際、一般講演は「しない」にチェックを入れ、講演タイトルの登録はスキップして下さい。取得した大会登録番号を、講演タイトルとあわせてシンポジウム企画者に伝えて下さい。タイトルは企画者の方でまとめて登録します。
・招聘・招待講演者以外は、JTB アマリスから参加申込を行い大会参加費を納入してください。受付開始は 9 月末の予定です。

企画集会講演

・大会企画委員会から認められた非会員講演者を除き、申込・発表できるのは、2014 年 10 月 23 日までに会費を納入した正会員のみです。
・大会公式ホームページの大会登録システムから発表登録を行って下さい。この際、一般講演は「しない」にチェックを入れ、講演タイトルの登録はスキップして下さい。取得した大会登録番号を、講演タイトルとあわせて集会企画者に伝えて下さい。タイトルは企画者の方でまとめて登録します。
・発表登録と合わせて、JTB アマリスから参加申し込みを行い大会参加費を納入してください。
・非会員の講演予定者も、会員と同様に発表登録と大会参加費の納入を行って下さい。

自由集会講演

・自由集会は学会員である集会企画者の責任によって行われ､講演等を行うのに学会員である必要はありません。また、自由集会のみに参加（講演を含む）する場合には大会参加費は不要です。

聴衆としての参加

・JTB アマリスから参加申込を行い大会参加費を納入してください。当日参加も可能です。
・非会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。
・大学の学部学生以下（中・高校生を含む）の大会参加費は、聴衆としての参加の場合、無料です（大会公式ホームページからの事前申込は行いませんので、当日大会の受付に学生証提示の上お申し出下さい）。また、高校生ポスター発表会での発表も無料です。ただし、その他の一般講演などで発表する場合は、大会参加費の支払いを含む通常の手続きが必要です。

大会参加資格一覧

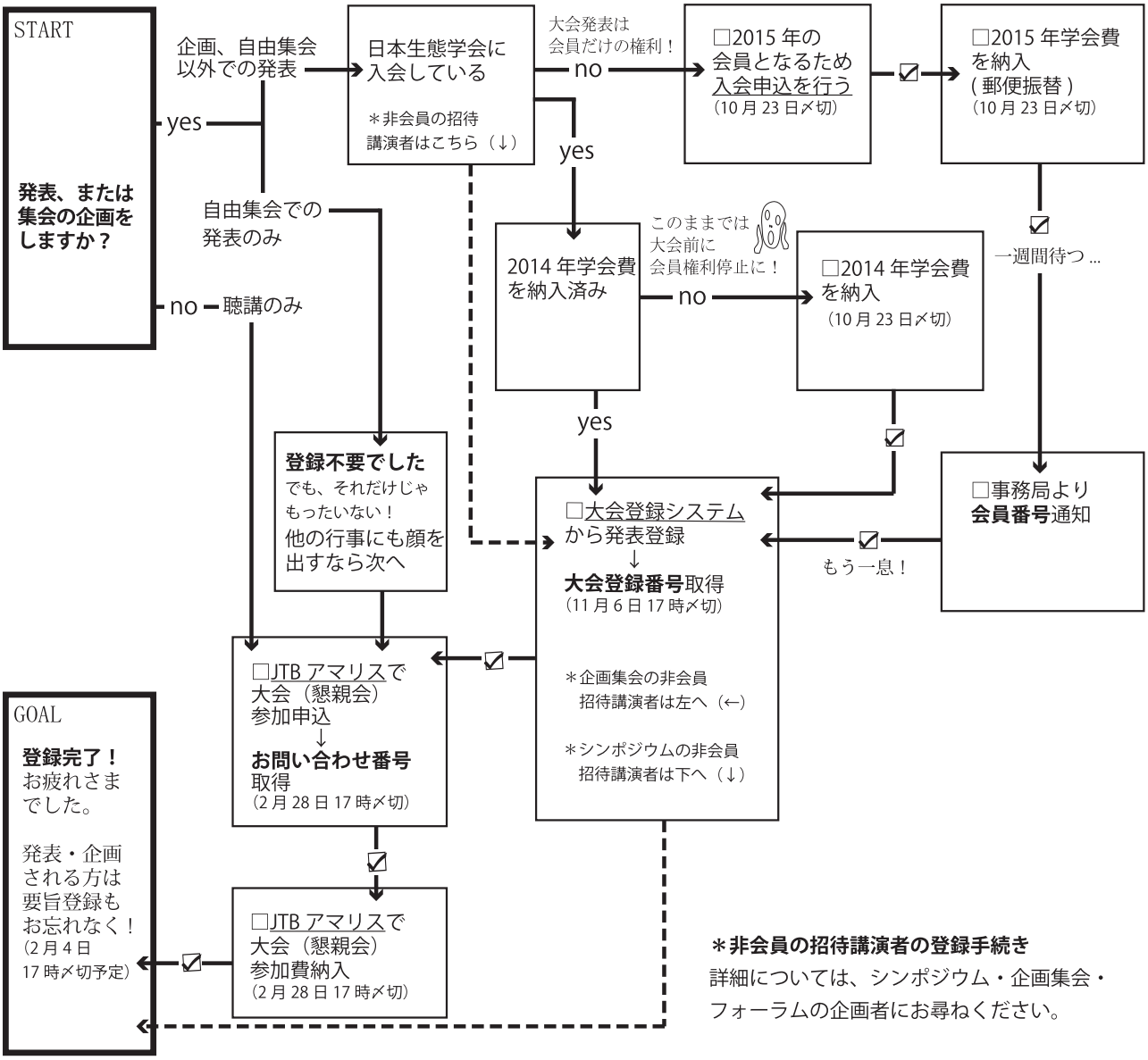
会員と非会員の大会参加資格は以下の通りです。非会員の資格は限られますので、この機会にぜひご入会ください。なお、講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧下さい。

講演種別 ＼ 会員種別	正会員	非会員
一般講演（口頭・ポスター）	○	
シンポジウム企画	○	
シンポジウム講演	○	○
シンポジウム・企画集会・自由集会のコメンテータ *1	○	○
企画集会企画	○	
企画集会講演	○	○ *2
自由集会企画	○	
自由集会講演	○	○

*1　要旨を登録しないコメンテータ。要旨登録を行うコメンテータの資格は「講演」に準じます。
*2　大会企画委員会・大会実行委員会が特別に認めた場合に限り、集会あたり 1 件まで可能です。

・非会員が発表･企画を希望される場合は､2014 年 10 月 23 日（木）までに 2015 年の入会を申し込むとともに、2015 年の学会費を納入して学会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。
・高校生ポスター発表会については、高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」の詳細をご覧下さい。
・非学会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。

大会申し込みチャート



名札の事前郵送

・当日受付の混雑解消のため、2 月 28 日までに大会参加費を振り込まれた方には、JTB アマリスに登録された住所（日本国内の場合のみ）に名札などを郵送します。当日ご持参の上、直接、発表会場にお入りください。
・名札をお忘れになった場合は、当日受付にお申し出ください。
・大会参加費を振り込んだにも関わらず、3 月 13 日（金）までに名札が届かない場合は、大会ホームページの問い合わせページからお問い合わせください。

入会方法

下記ウェブページから申込後、必ず受付メイルの指示に従い、締切日までに学会費を納入してください。2014年10月23日締切厳守でお願いします。

※学会費納入の確認には約一週間かかります。また、郵便振替用紙に受付番号等の記入がない場合、参加申込に必要な会員番号発行の処理が遅れますのでご注意ください。

入会に関する問合せ先（大会に関する問合せには対応できません）
〒603-8148　京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局
http://www.esj.ne.jp/office/member/index.html
TEL & FAX 075-384-0250

発表登録の注意点

・大会登録番号は、要旨の登録の際に必要となりますので、発表登録時にご自分で設定するパスワードと合わせて、注意して管理してください。
・シンポジウム、企画集会、自由集会、フォーラムの講演は、企画者が一括して申込みますので、講演者が個別に講演申込をする必要はありません。ただし、シンポジウムと企画集会の講演者は、後日講演要旨を登録するため、大会参加申込とは別に大会公式ホームページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/62/）から発表登録を行い、“大会登録番号”を取得して下さい。（シンポジウムと企画集会で講演する非会員の方も、同様に大会登録番号を取得して下さい）。
・申請者の入力ミスは、原則として訂正しない方針です。文字化けについても対応いたしません。

大会プログラム

・大会プログラムは、2015年1月頃に大会公式ホームページで公開され、どなたでもご覧になれます。
・大会プログラムの冊子は、2015年2月頃に日本生態学会の全ての会員に郵送されます（学会費未納の場合は除く）。プログラムの郵送を希望される会員は、必ず2014年内に2015年の学会費を納入してください。
・プログラム冊子は、当日会場受付にて1冊500円で販売します。非会員で冊子が必要な方は、お求めください。

講演要旨集

・講演要旨集は、HTML版で作成し公開されますが、冊子体とPDF版は作成しません。
・HTML版講演要旨集は、2月中に大会公式ホームページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/62/）から閲覧できる予定です。インターネット接続機能を持った携帯電話等でご覧頂くことも可能です。また、大会のすべての講演要旨は学会サイト（http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/index.html）からZIP形式の圧縮ファイルで一括して入手できるようになる予定で、それを解凍して個人のパソコン等に入れておけば、ネット上と同じように閲覧したり、日程表、講演者やキーワードを検索することが可能です。

各種集会の企画提案

・シンポジウムの企画提案はすでに締め切られています。
・企画集会、自由集会、フォーラムについては、「企画集会と自由集会」「フォーラム」をお読みの上、企画をご提案ください。
・企画提案時の概要（2014年11月6日（木）締め切り）がそのままプログラム・要旨集に掲載されます。また、差し替えには一切応じられませんので、ご了承ください。

企画集会と自由集会

・本大会では、下記の要領で、企画集会と自由集会を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集されます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申込下さい。
・企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会正会員である必要があります。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

＜企画集会＞

・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。

・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者になることはできません。
・企画集会の企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
・企画集会での講演者（主たる説明者）は原則、日本生態学会会員に限定されます。非会員による講演は特に事情がある場合に限り、**企画あたり 1 件まで**認められます（申込方法は下記を参照）。ただし、同一の非会員が 2 年連続で、企画集会で講演することは認められません。また、非会員の講演者に対する大会参加費の免除は行いません。
・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は 1 講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。
・限られた会場を平等に分け合って使用するため、企画集会はできるだけ 3 人以上の講演者で構成して下さい。

＜自由集会＞
・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
・一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。
・**大会の正式行事ではありませんので、会場は集会主催者が責任をもって管理して下さい。**
・自由集会の時間枠は、大会初日の各種委員会や全国委員会と並行した時間帯等に設定される可能性が高くなっています。これらの委員を企画・講演者・コメンテータ等に含む自由集会についても、原則として開催時間の調整は行いません。

応募要領
・企画集会または自由集会の開催を希望される方は、**2014 年 11 月 6 日（木）17:00** までに大会公式ホームページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/62/）から集会の提案・概要登録を行って下さい。この際、講演者（主たる説明者及び共同発表者）と講演タイトルも併せて登録します。
・企画集会の提案を登録する際、集会企画者と全講演者の大会登録番号および講演タイトルが必要となります。集会企画者は、あらかじめ共同企画者や講演予定者（会員・非会員とも）に連絡して各自の大会登録番号を取得してもらい、その番号を聞いておいて下さい。
・**企画提案時の概要がそのままプログラム・要旨集に載ります。また、差し替えには一切応じられませんので、ご了承ください。**

企画集会で非会員の講演を希望する場合
・企画者は、集会の提案・概要登録の際に、登録システムの「非会員による講演の申請」欄に、非会員講演者の氏名と、その方の講演を必要とする理由を記入して下さい。
・非会員の講演予定者は、他の講演者と同様の手続きにより大会登録番号を取得して下さい（『参加申込』欄を参照）。
・以上の手続きの〆切は、いずれも 2014 年 11 月 6 日（木）17:00 です。非会員による講演の可否は 11 月 18 日（火）までに企画者あてメールでご連絡します。

企画集会と自由集会の採否について
・企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会（企画集会・自由集会）の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。
・自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会（自由集会・企画集会）の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。
・限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮下さい。2 つ以上の自由集会の企画・講演もご遠慮下さい。
・開催の可否については、11 月 18 日（火）までにメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事。	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事。	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません。
開催時間	約 3 時間	約 2 時間	約 2 時間
開催の優先度	最優先されます。	シンポジウムの次に優先されます（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）。	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）。
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます）。	シンポジウムの次に優先されます。	優先されません。
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネータとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。
企画者の資格	正会員	正会員	正会員
非会員による講演	奨励します（審査の上、招待講演者として大会参加費を免除します）。	集会あたり 1 件まで可（同一非会員の 2 年連続は不可）。大会参加費を支払う必要があります。	認められます（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）。
海外からの招聘講演者に対する学会からの旅費支給	大会全体で最大 4 名程度認められます。	なし。	なし。
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会との重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能。	自由集会・フォーラムのみ可能。	全て可能。
提案締切日	7/31（木）	11/6（木）	11/6（木）
概要登録 / 集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	11/6（木）	11/6（木）	11/6（木）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要のみ掲載されます。

フォーラム

フォーラムとは、生態学会の各種委員会が企画し、生態学会の運営や学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複講演制限の対象となりません。申込は各委員会代表者が行います（別途ご案内します）。

一般講演

・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申込時に希望（口頭発表かポスター発表）をお聞きしますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

・海外からの招待者や留学生など、日本語を解さない参加者との交流のためにも、英語での発表や、日本語の発表の場合でも一部英語併記を推奨します。
・発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申込時に希望分野を選んでいただきます。一般講演申込のフォームに選択可能な分野一覧が示されます。人数や会場の制約のため、希望された分野で発表できない可能性があります。以下は発表申込のときに示される発表分野（候補）の一覧です。

群落／植物個体群／植物生理生態／植物繁殖／植物生活史／菌類・微生物／景観／遷移・更新／
動物と植物の相互関係／進化／生物多様性／数理／動物群集／動物繁殖／動物個体群／動物生活史／
行動／保全／生態系管理／外来種／物質循環／生態学教育・普及

注意：
・一般講演の講演者（主たる説明者）は、日本生態学会会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
・さらに、**シンポジウムの企画者・講演者、企画集会の企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。**
これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご理解ください。

口頭発表の方法
・口頭発表は、原則として、会場備え付けの機器を使用したマイクロソフト・パワーポイントあるいは PDF による発表とします（持ち込みのコンピューターは使用できません）。発表用ファイルの登録締め切りは大会開始の数日前となる予定です。詳細は大会ホームページで追ってご案内します。
・発表用ファイルを使用せず、印刷物を配布して発表することもできますが、十分な部数の配布物を発表者側で準備して頂きます。また、ファイル登録締め切りまでに、発表用ファイルを使用しない旨、大会ホームページの問い合わせページから申し出てください。

ポスター発表の方法
・ポスターボードは縦長（90 cm × 210 cm）のものを使用する予定です。ポスター発表は、大会期間中に 2 日に分けて行い、最大約 1000 件のポスター発表を収容できる予定です。ポスター発表の申込数が収容可能数を超えた場合は、一部の方に、口頭発表への変更をお願いすることがあります。
・海外からの招待者や留学生など、日本語を解さない参加者との交流のためにも、英語での発表や、日本語の発表の場合でも、一部英語を併記したり、英語版の別刷りを用意したりすることを推奨します。
・ポスターを貼るための画鋲は持参して下さい。例年、会場周辺の店舗では品薄になりますので、ご注意下さい。

ポスター賞

若手研究者の研究活動を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。応募資格については、下記をご参照ください。ポスター発表に関する詳細は大会ホームページにも掲載しますので、ポスターを準備するときの参考にしてください。

ポスター賞応募資格について
本大会では、主たる発表者のポスター賞応募資格について以下の条件を設けます。

1. 一般講演の申込締め切り期限（2014 年 11 月 6 日）の時点で博士号未取得の若手会員（学部学生、大学院生、研究生）とします。
2. 過去の日本生態学会大会（ESJ）ポスター賞「最優秀賞」または「優秀賞」を受賞した者は、上記の条件を満たしていても応募できないものとします。過去の日本生態学会大会は EAFES と合同で運営された大会を含みます。

ポスター賞審査の要点
選考上重視されるポイントには以下のようなものがあります。ポスター賞応募者は、これらの点に十分考慮してポスター作成をお願いします。

（A）ポスターの情報伝達能力

ポスター発表では、研究内容がわかりやすく表示されているかが重要です。例えば、（1）良いタイトル、（2）わかりやすい要旨、（3）視線を引きつける工夫、（4）短時間でおおまかな内容が伝えられる工夫などが必要でしょう。そのためには、字・図表が遠くからでも判読できる、情報過多でない、説明なしでも要点が理解できることなどが重要です。

（B）研究の質

（1）新規性・独創性、（2）データの質・量、（3）解析方法の妥当性、（4）議論・結論の妥当性について審査されます。

なお、これまで審査対象であった「発表技術」については、前回大会より審査対象からはずしました。優れたポスターは読んだだけでその意義を理解できると考えられるためです。また、ポスター賞の応募者が多いため、審査に要する負担が著しく高まっていることも理由の一つです。ただし、ポスターを見ただけでは評価しにくい項目については、審査員が発表を聴き質問して評価することがあります。

また、本学会では国際交流に力を入れて取り組んでいます。このため、日本語を理解しない研究者に対して配慮がなされているかも重視します。審査の際には使用言語に関わらずポスターの内容についてのみ評価しますが、審査の結果同票だったポスターについては英語による理解が可能なポスターの順位を繰り上げます。英語による理解が可能なポスターとは、少なくとも、タイトル、イントロおよび結論が英語併記される等して、英語を読むだけで研究の概要を理解できる場合、あるいは英語の別刷りが用意されている場合に該当します。英語の別刷りを用意した場合は、別刷り 1 部を常にポスターボードに貼付しておいて下さい。

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」は、生態学の社会への普及のため、日本生態学会によるアウトリーチ活動の一環として企画します。大会会期中に高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学に関連する諸分野の研究者や学生との交流を通して、生態学全般への関心をもっていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。なお、高校生ポスター発表会での発表は、大会参加費は不要（無料）です。

今年度より、「みんなのジュニア生態学講座－高校生と研究者の交流会」を新たに企画しました。気鋭の若手生態学者による高校生向けのトーク（話題提供）と高校生と研究者の交流会を行います。詳細は随時、大会公式ホームページなどでお知らせします。

要項

【日時】2015 年 3 月 21 日（土）

開場：9:00（到着したら受付を済ませてポスターを貼り出してください）

発表コアタイム（発表・審査）：10:30 ～ 12:30（遠方の高校は 11:30 ～ 12:30）

みんなのジュニア生態学講座（高校生と研究者の交流会）：13:45 ～ 15:15

成績発表・表彰式：15:30 ～ 16:00（成績発表・表彰式）

【会場】鹿児島大学 教育学部

ポスター発表：第二体育館 高校生ポスター会場（卓球場フロア）

交流会・表彰式：第一講義棟 101 講義室

【大会参加費】無料。発表者の全員（人数に制限なし）および引率者は、大会参加費が免除されます。

【発表資格】原則として、高等学校または高等学校に相当する教育機関に在籍する生徒であること。国籍は問いません。

【発表内容】生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも受け付けます。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。

【発表数】本大会においては、**1 校あたりの発表数は最大 4 件までとします。**ただし、発表の応募総数が大会会場の収容可能な発表数を超えた場合は、発表件数の多い高校を対象に、発表数の調整をお願いすることがあります。

【発表方法】本大会の指定するパネルサイズ（横 90 cm ×縦 210 cm）に納まるポスターであること。当日、9:00 にはポスターを貼ることができます。発表者（複数可）は、発表コアタイムにポスターの説明を口頭で行ってください。なお、当日 9:30 までに会場に到着できる高校につきましては、発表登録後にお知らせする講演番号が偶数の高校が 10:30 ～ 11:30 まで、講演番号が奇数の高校が 11:30 ～ 12:30 までをコアタイムとします。遠方の高校で 9:30 までに会場に到着することができない場合には、11:30 ～ 12:30 までをコアタイムとします。発表は 13:00 をもって終了とします。

【審査員】ポスター 1 件につき複数名の審査員が配置され、質問やコメント、アドバイスをします。
【ポスター賞】選考委員会が内容を評価し、発表されたポスターは最優秀賞、優秀賞などとして表彰します。
【みんなのジュニア生態学講座－高校生と研究者の交流会】
日本生態学会で現在大活躍中の若手 3 名に、ご自身の研究内容だけでなく、生態学の研究を目指したきっかけや中学～高校の様子を語って頂きます。
・塩尻かおり（京都大学・白眉センター）「植物の誘導性の匂いがもたらす生物間相互作用」
・高橋佑磨（東北大学・学際科学フロンティア研究所）「行動と色彩と遺伝子から生物の分布を解き明かす」
・山北剛久（［独］海洋研究開発機構 JAMSTEC）「空間の視点からとらえた海洋生物の局所と広域の分布」

申込み手順

・発表を希望する高校は、2014 年 10 月 30 日（木）17:00 までに、電子メールで件名に『みんなのジュニア生態学』と記入して、下記、申込事項（1）～（4）を送付先メールアドレスに送ってください。なお発表希望申込数が非常に多い場合には、申込先着順で打ち切る可能性もありますので、早めのお申込をよろしくお願いいたします。
・発表要旨（日本語で 500 字以内）は、2015 年 1 月 28 日（水）17:00 までに電子メールで件名に『みんなのジュニア生態学発表要旨』と記入して、メール本文に貼り付けて以下の送付先メールアドレスに送ってください。文字化けの原因となる文字（囲み数字、囲みアルファベット、外字）が含まれていないかを送信前に確認してください。
【注】申込や要旨登録の不備に大会企画委員会高校生ポスター部会が対応するため、高校生ポスターの申込と要旨登録の締め切りは一般講演よりも早めになっております。くれぐれもご注意ください。なお、申込内容や要旨の修正の要望が例年多数寄せられます。登録段階で以後の修正がないようにご配慮をお願いします。これらの修正は、一般講演の締切後は、いかなる理由があろうとも対応できませんので、あらかじめご承知願います。

申込事項

（1）責任者（顧問教師、保護者など）の情報
a. 氏名（フリガナも）
b. 住所（職場／自宅を選択）
c. 電話番号（職場／自宅／携帯を選択）
d. E-mail アドレス
e. 緊急の連絡先（責任者の電話番号など）
f. 連絡してよい時間帯
注）申込に関する責任者は教師や保護者とします。必ずしも、大会当日に生徒を引率する方でなくてもかまいませんが、要旨登録などの諸手続きに責任を負っていただける方にしてください。なお、e. 緊急の連絡先には、大会当日だけでなく、大会準備期間にもご連絡差し上げる可能性がございます。日本生態学会は各種申込の締め切りに非常に厳格です。発表申込や要旨登録の締め切り直前に、登録内容の不備を発見した場合などには、緊急で連絡させていただくことがあります。あらかじめご了承ください。
（2）学校の情報
a. 高校名（フリガナも）
b. 高校の住所
c. 高校の電話番号（代表）
（3）発表ポスターの情報
a. タイトル
b. ポスター著者全員の氏名と所属
表記例：山田花子、田中太郎（鹿児島科学高校）、鈴木一郎、伊藤さちこ（鹿児島農業高校生物部）
注）顧問教師の方もポスター著者に加わることができます。
c. 発表者の氏名（高校生に限る）
第一発表者の氏名には必ずフリガナを振って下さい。
表記例：山田花子（ヤマダ ハナコ）、田中太郎
注）ポスター著者のうち、実際に大会に参加し発表する方の氏名を書いてください。引率者を含めないでください。
（4）引率者の情報
a. 氏名（フリガナも）
b. 引率者の緊急の連絡先（携帯電話番号）

送付先／お問合せ先

大会企画委員会・高校生ポスター担当 和田直也
〒 930-8555　富山市五福 3190
富山大学極東地域研究センター／理学部 1 号館
電話　076-445-6678、FAX　076-445-6549
E-mail: hs_poster@mail.esj.ne.jp

英語口頭発表賞

本大会では、英語口頭発表賞を設けて審査を実施します。賞の運営・審査については下記をご参照ください。英語口頭発表賞の詳細は、ホームページ（https://sites.google.com/site/esj62engpresenawarden/）にも掲載しますので、準備の参考にしてください。

運営・審査方針

この賞には、大会での英語を用いた「科学コミュニケーション」を振興する目的があります。**本賞は単なる英語スピーチコンテストではなく、英語の流暢さそのものを競うものではありません。応募者には発表の学問的内容と人に伝える技術や姿勢を競っていただきます。**応募者は聴衆の多くが必ずしも英語を母国語とはしないこと、また、さまざまな研究背景を持つことを前提に、自身の研究成果をより多くの人にわかりやすく伝えるよう努力してください。結果として意思伝達が不十分な場合でも伝達しようとする意欲や工夫を審査では評価したいと考えています。さらに今年度は、賞の審査対象に該当する若手の発表（＝審査対象発表）に加えて、一般の参加者の発表も募集する予定です。これにより、発表総数を増やし、英語口頭発表賞セッションをよりいっそう盛り上げていこうと考えております。

運営の流れ

・応募者は英語口頭発表賞に仮エントリーする（9 月 1 日締め切り）。
・英語賞部会が講演内容別に複数のセッションに振り分けます。このとき応募者多数の場合は部門によっては一部を不採択としたり、応募者少数の場合は、部門ごとに分かれずに分野横断的に審査を行ったりする場合があります（9 月下旬までに決定）。
・英語賞部会は部門毎に最低 3 人の審査員を依頼します。
・英語賞部会はエントリーした応募者に、発表賞参加の採否を伝えます。同時に参加申込と大会登録を行うよう応募者に通知します（9 月末まで）。
・賞該当発表の部門の枠組みが決定後に、一般の参加者の発表も「一般講演」の枠組みの中で募集します。

審査方法の大枠

英語口頭発表賞は、単なる英語スピーチ能力のコンテストではありません。講演者は自身の流暢な英会話力を単に売り込むのではなく、聴衆との円滑で満足度の高い「科学コミュニケーション」を図るための努力を熱意と誠意をもって示してください。

（1）各審査員は各発表を研究の中身（質）への比重を 50%、聴衆への配慮や熱意などへの評価を 50%とし、絶対評価します。
（2）上記評価は絶対評価のため、審査員ごとに上位 1、2、3 位を選び、その順位を集計して部門ごとに受賞者を決定します。

審査方法の詳細は以下の URL をご覧ください。
https://sites.google.com/site/esj62engpresenawardjp/evaluation

スライド作成上の注意

口頭説明の言語は英語ですが、発表スライドは英語または和英併記とします。

公開講演会「南西諸島の生物多様性、その成立と保全 」

温帯から亜熱帯を含む南西諸島は、地史的なプレート運動による大陸との分離や結合が繰り返され、また気候変動や海流によって、独自の生物相を育んできました。こうした陸域や海岸域の生物多様性や固有種を含む貴重性から、世界自然遺産登録の候補地として注目されています。公開講演では、南西諸島の生物多様性の成立と今後の保全について最近の知見や動向を紹介しながら、広く市民の方々と一緒に考える機会を持つことを目指しています。

講演会タイトル：「南西諸島の生物多様性、その成立と保全」

日時：2015 年 3 月 22 日（日）13:00 ～ 16:00
会場：鹿児島大学 郡元キャンパス 教育学部 101 講義室
プログラム
司会：鈴木英治（大会会長）
開会の辞 / 趣旨説明：船越公威（鹿児島国際大）
講演：講演：横田昌嗣（琉球大）、太田英利（兵庫県立大）、山田文雄（森林総研）、寺田竜太（鹿児島大）、本村浩之（鹿児島大学）

懇親会

懇親会は 3 月 20 日（金）18:30 から、サンロイヤルホテル（http://www.sunroyal.co.jp/）で行います。総会･授賞式･受賞講演の会場（鹿児島市民文化ホール）から徒歩 3 分です。終了後は繁華街行きシャトルバス（無料）を運行します。焼酎や黒豚料理以外にも鹿児島の名物を取りそろえておりますので、ぜひご参加ください。参加申し込みと納入は JTB アマリス（https://amarys-jtb.jp/esj62/）からお願いします。

託児所

これまでの大会と同様に、大会会場の鹿児島大学内に託児室を設置する予定です。開設時間や申込方法などの詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

エコカップ 2015 鹿児島大会

大会サテライト企画として、日本生態学会大会に合わせて開催されてきた親善フットサル大会（5 人制のミニサッカー）は、大会前日の 3 月 17 日（火）午後に鴨池ドームで開催されます。詳細はホームページ（http://esj2015.wordpress.com/）にてご確認ください。

宿泊・交通案内

大会中の宿泊は各自での手配をお願いします。JTB アマリスにも宿泊に関する情報が掲載される予定です。JR 鹿児島中央駅周辺や、鹿児島の繁華街「天文館」周辺には多くの宿泊施設がありますが、大会期間中は混み合うことが予想されますので、早めの手配をお勧めします。

大会会場（鹿児島大学郡元キャンパス）へは、JR 鹿児島中央駅から徒歩で 20 分程度です。路面電車や路線バスも利用できますが、通勤・通学時間帯は大変混み合いますのでできるだけ徒歩でお願いします。路面電車は中央駅経由と交通局前経由の 2 系統あり、大会会場最寄り駅は、「工学部前」と「騎射場（きしゃば）」です。天文館方面からは後者の方が近いですが、駅から会場まで徒歩 5 分程度かかります。詳しくは、大会公式ホームページで追ってご案内します。

なお、鹿児島空港からは、JR 鹿児島中央駅近くの鹿児島中央バスターミナル及び天文館までリムジンバスが 10 分間隔で出ています。

ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

記　事

Ⅰ．書評依頼図書（2014 年 2 月～ 2014 年 8 月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はＥメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 原口昭著「日本の湿原」（2013）208pp. 生物研究社 ISBN:978-4-915342-67-7
2. 日本生態学会編　原登志彦担当編集「現代の生態学 2 地球環境変動の生態学」(2014)284pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05741-8
3. 総合地球環境学研究所編「地球環境マニュアル 1 共同研究のすすめ」（2014）106pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18045-9
4. 総合地球環境学研究所編「地球環境学マニュアル 2 はかる・みせる・読みとく」（2014）134pp. 朝倉書店　ISBN:978-4-254-18046-6
5. 日本生態学会編　佐竹暁子・巌佐庸担当編集「現代の生態学 4　生態学と社会科学の接点」（2014）204pp. 共立出版（株）ISBN:978-4-320-05742-5
6. 武内和彦・渡辺綱男編「日本の自然環境政策　自然共生社会をつくる」（2014）250pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060310
7. 富田涼都著「自然再生の環境倫理－復元から再生へ」（2014）248pp. （株）昭和堂　ISBN:978-4-8122-1254-4
8. 宮下直著「生物多様性のしくみを解く　第六の大量絶滅期の淵から」（2014）240pp. （株）工作舎 ISBN:978-4-87502-456-9
9. 田付貞洋編「アルゼンチンアリ　史上最強の侵略的外来種」（2014）342pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-06224-2
10. 藤崎憲司・大串隆之・宮竹貴久・松浦健二・松村正哉著「昆虫生態学」（2014）218pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-42039-5
11. 根本正之･冨永達編著「身近な雑草の生物学」（2014）152pp. 朝倉書店　ISBN:978-4-254-42041-8
12. 多田満著「センス・オブ・ワンダーへのまなざし　レイチェル・カーソンの感性」（2014）326pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-063341-3
13. 大槻久著「岩波科学ライブラリー 226　協力と罰の生物学」（2014）124pp. 岩波書店　ISBN:978-4-00-029626-7
14. H.G.Jpnes・R.A.Vaughan 著 久米篤・大政謙次監訳「植生のリモートセンシング」（2014）452pp. 森北出版株式会社　ISBN:978-4-627-26101-3

Ⅱ．寄贈図書

1. 「うみうし通信　No.83」（2014）12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
2. 「北海道爬虫類両棲類研究報告　Vol2」（2014）54pp. 北海道爬虫類両棲類研究会
3. 「東京大学大気海洋研究所 2014 要覧・年報」（2014）120pp. 東京大学大気海洋研究所
4. 「稲森財団 2013―第 29 回京都賞と助成金」（2014）350pp. 公益財団法人稲森財団

お　知　ら　せ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 平成 27 年度笹川科学研究助成

①本制度は、新規性、独創性または萌芽性をもち、発想や着想に意外性をもった研究に焦点をあて、優れているものの他からの支援が受け難い研究を掘り起こし、助成することにより、科学・技術研究の振興を図ることを目的としています。
②学術研究部門 100 万円／件､実践研究部門 50 万円／件を限度とし、研究の実施に直接必要な経費を対象とします。
③学術研究部門は 10 月 15 日（水）17:00 まで、実践研究部門は 11 月 14 日（金）17:00 まで
④公益財団法人日本科学協会　笹川科学研究助成係
〒 107-0052　東京都港区赤坂 1 丁目 2 番 2 号　日本財団ビル 5F
TEL 03-6229-5365　FAX 03-6229-5369

(2) 鹿島学術振興財団 2014 年度研究助成

①都市・居住環境の整備、国土・資源の有効利用、文化的遺産・自然環境の保全等による国民生活の向上に寄与する研究。
②総額 3,700 万円（1 研究課題への助成金は継続期間を含めて合計 300 万円以内）
③ 2014 年 11 月 10 日（月）
④日本生態学会事務局（学会推薦が必要です）

(3) 第 53 回（平成 26 年度）下中科学研究助成金

①学校の先生方の教育のための真摯な研究を助成。全国小、中、高校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（教育センターを含む）を対象とし､研究は個人であると共同であるとを問いません。なお、応募は一人 1 点に限ります。
②総額 900 万円。1 件当り 30 万円。30 件を予定します。
③平成 26 年 12 月 10 日（当日消印有効）
④公益財団法人下中記念財団事務局

(4) 平成 27 年度 多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究・活動助成

①

1. 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
2. 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
3. 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究
4. シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川及びその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与するもの。

②※ 1 件当りの助成金総額の上限額
学術研究：400 万円
一般研究：100 万円

③ 2015（平成 27）年 1 月 15 日（木）消印有効

④公益財団法人とうきゅう環境財団

書　評

川那部浩哉・水野信彦監修　中村太士編（2013）「河川生態学」講談社 356pp. ISBN:978-4-06-155232-6　定価 5800 円（税別）

本書は、書評執筆者らが生まれるほぼ 10 年前の 1972 年に刊行された「河川の生態学」（沼田真監修 水野信彦・御勢久右衛門著：以下、簡単のため“前作”と呼ぶことにする）の大幅改訂版である（前作も補訂を重ねていた）。「おわりに」にある水野さんの“改訂を怠ったために、内容が古くなりすぎ、10 年ほど前に御勢先生と相談して、絶版にしていた”という真摯な語りに加え、「監修者の言葉」にある“（中村さんの）仕事ぶりに感激した 2 人（補足：川那部さんと水野さん）は、「見事な監修者を選んだ」などと、自画自賛したものである”といった記述を読むと、これらの本には歴代の魂がこもっているなぁと、面識もないのになぜか目頭が熱くなりました。

話がそれてしまいましたが、総評として、河川生態学の全体像を眺めるための大変良い教科書で、この分野に興味を持つ皆さんにとてもお勧めです（ただ、少し値が張ります）。大事なので、繰り返します。大変オススメです。大作ですので、通して読むのが辛い方は、必要な部分を掻い摘んで読んだり、辞書的に使ったり、あるいは研究室の輪読本にしてもいいように思います。

大きな章立てとしては（括弧内は抽出したキーワード）、①河川環境について（水文、水理、地形）、②河川における物質の流れ（有機物、栄養塩）、③河川生物の生態（付着藻類、底生無脊椎動物、魚類などの各分類群）、④川の生物多様性を支える仕組み（攪乱、ネットワーク、生態系間相互作用）、⑤河川生態系を脅かす課題と今後の展望（ダム、外来種、復元）となっています。底生生物（本作でいう、底生無脊椎動物）及び魚類の生態学的研究と題した章が 8 割以上の頁を占める前作とは、取り扱う範囲が大きく広がった事は一目瞭然です。ただし、本作で割愛されている内容もあり（例えば、調査方法の具体的内容）、前作と重複する内容の部分を読み比べるのも一興です。また、全体として、個別研究の紹介というよりは、総説的な内容（既往の研究成果からまとめられるより普遍的な知見）の紹介に移行してきており、より教科書的に仕上がっているように思います（そういう意味でも、生データの多い前作を読む価値はまだまだあるように思います）。この点について、1 つだけコメントを残すとすれば、執筆者自身の研究成果に偏っている節や分量的に少し物足りない節もあるように感じました。

これだけの網羅的な内容を有する本書ですので、以下では、3 人の書評執筆者が独断と偏見で取捨選択した感想を 1 段落ごとに書き記したいと思います。

岩崎から。まず、ボクも含めて（おそらく）多くの河川生態学者が得意としない（が大事な）、水文学・水理学の話が最初にあるのが良いです。ちなみに、余談ですが、現在の河川生態学におけるメジャー度から考えると驚くべきことに、前作には付着藻類だけを取り扱った章節はありませんでした。また、河川間隙水域（4.3）や河川をネットワークとして捉える考え方（4.6）などの節は個人的に目新しく楽しく読ませて頂きました。最後に、前作では底生生物及び魚類の両章に含まれていた水質汚染の生物影響に関連した記述が本作にはほとんどないのは、少し淋しい気もしました。が、当時と比較して水質が大きく改善されていることを鑑みれば、現況が反映されているといえるのかもしれません（水質を問題にする必要はないという意味ではないです）。

境からです。河川に見られる様々なつながり（上―下流、地下水―表層水、陸域―水域）から河川生態系を捉える、学際的な視点の重要性を学ぶことができる一冊だと思いました。本書では、これまでに集積した研究成果が丁寧に解説された上で、河川生態系管理の課題と展望へと続いており、読み終えた後のワクワク感が大変心地よいです。その一方で、各種河川復元事業の結果から新たに集積していく学術的成果が、数年後、数十年後の河川生態学にどう活かされていくのかについてその展望も知りたくなりました。また、本書評執筆者それぞれが異なる専門でありながらも、この本を通じて意見交換できたのも、網羅的に河川生態学を記した本書の凄さを物語っているのでは、と感じています。河川に携わる人間も、河川生態学のように網目状につながっていきたいですね！

梁です。僕は水文・土木学を専門としており、生態学に関する知識はほとんど皆無ですが、全編を通して非常に分かりやすく、終始ワクワクしながら読むことができました。水文と生態学をつなぐ流量の多様性（4.1-3）も体系的に紹介されています。網羅的な生態知識を簡潔かつ専門的に学べた上に、河川生態に鳥類（3.6）まで入ってくるのか！と目からウロコでした。土木工学が進めてきた河川改修（5.1）、これは経済発展、効率的水資

源利用や安全性の確保のための涙ぐましい努力であり、先人を否定する気は毛頭ありませんが、環境問題が叫ばれている昨今､河川土木に従事する人にとっても必読書、となりうる一冊ではないでしょうか。

以上、色々と試行錯誤して書いてみましたが、本書評執筆者らはどちらかといえば応用的な視点を持っており（岩崎：生態毒性学（底生動物）、境：河川生態学（底生動物）、梁：水文学）、この書評にも偏りや抜けている視点があるように思います。是非、他の専門分野の方（例えば、河川生物を研究題材にしている行動生態学者）からの評価も聞いてみたいものです。とりとめもない提案としては、関連学会などで、記述が足りない部分などの課題を公開で議論できる機会があるとおもしろいかもなぁと思いました。

おしまいに、何を隠そう、編者の中村さんが本書の最初によせている「序文」が本書の全体像とその意図を包括的にかつ簡潔に説明しています。全体の内容を手っ取り早く知ってもらうためにもこの文章はウェブサイト等に公開されるべきだと思いますし、本書に興味をお持ちの皆さまは我々の書評などよりもまずそれを読むべきである（と、元も子もないことを述べてこの書評を締めくくりたい）。

（東京工業大学　岩崎雄一・梁政寛、東京農工大学 境優）

J.N. Stokland, J. Siitonen, B.G. Jonsson 著　深澤遊、山下聡訳（2014）「枯死木の中の多様性」京都大学出版会　553pp. ISBN:978-4-87698-475-6　定価 6600 円（税別）

本書は 2012 年にケンブリッジ大学出版局から出版された *Biodiversity in Dead Wood* の全訳である。タイトル内の“生物多様性”ということばからは、生食連鎖にかかわる動植物をイメージされる方が多いのではないだろうか。しかし、その生存には、資源のリサイクル機能を担っている腐食連鎖の存在が欠かせない。腐植連鎖は生食連鎖より一般的に連鎖の数が多く複雑で、かかわる生物群集も微生物から脊椎動物までと多様である。“枯死材”の安定した環境は、腐食連鎖の主役である微生物群集に絶好の生息場所を提供し、その基質は彼らの巨大なエネルギー源であり養分源となっている。長期にわたり存在し続ける“大形枯死材”は、分解の進行に伴い基質の物理・化学特性が変化し多様な生物をひきつけ、さらに複雑な食物網を通じて資源が多様化することで生物多様性が高まる。枯死材は腐食連鎖に関わる生物群集のホットスポットである。本書はそれら生物の多様性の高さと生存メカニズム、さらに保全の在り方を解説した意欲的な啓蒙書である。

本書が定義する枯死木依存性生物とは、生活環のどこかで、生木や衰弱した木、あるいは枯死木の傷疾部や枯死部の樹木組織に依存しているあらゆる種である（生木段階での内生菌は含まない）。枯死木依存性生物の中には病害性の生物も存在する。枯死木はその病巣であり汚いものとして､排除の対象とみなされることが多かった。近年の森林劣化・減少過程において、さらに枯死材や伐り株をバイオマス燃料の資源とみなす森林管理においてそれらは林地から急速に消えつつある。それは、枯死木なしで生存できない絶対的依存種には絶滅への歩みでもある。読書後は、これまで何気なく見てきた枯死木の見方が少し変わるのではないだろうか。すなわち、枯死木依存種は危険で排除する対象から魅力あり大切で守るべき対象へ、さらに枯死木は“森のごみ・病巣”から“多様性の宝庫”へと。読み応えがある。

本書は 17 章からなり、4 つのパートから構成されている。2 － 4 章が“機能的な多様性”、5 － 9 章は“構造の多様性”、10-11 章が“組成の多様性”で、そして 12 － 17 章の“多様性の保全と管理”とつながる。全体で 553 頁の大著であるが、章ごとの独立性が高いので読みやすい。著者らが専門とする真菌類と昆虫とくに甲虫（鞘翅目）と他の分類群との記載内容での濃淡が気になり、章間での重複点もやや多く悠長に感じる箇所もあるが、依存種のすべての分類群の把握と、その生態を様々な分野から解説した内容から得るものが多い。

“機能的な多様性”は、2 章で分解基質としての木材の特性・多様な分解者による分解メカニズム・動物と菌との共生による分解を解説し、3 章で食物網の構造を 5 つの栄養段階で整理している。その間をつなぐエネルギーの流れといった定量的研究はこれからの課題である。枯死材依存性生物には栄養を介さない生物群も含まれる。たとえば、樹洞を営巣場所や避難場所として利用している生物、さらにコケや地衣類といった材上性の生物について 4 章で解説している。

“構造の多様性”においては、まずは木材の物理化学的特性を系統進化学的に整理している。これらの特性が似たハビタットをもつ樹種間の競争だけによるのでなく、その分解者群集である枯死木依存性種との共進化の産物でもあることを再確認させられる（5 章）。6 章では、枯死原因の違いがその後の依存性種の遷移の違い通して多様性を高めていることを、とくに真菌について詳しく解説している。枯死材はじつに多様な生息場所を提供している。それは樹皮・辺材・心材というメジャーなものから、生木の傷と樹液、樹洞、枯死した枝や根、真菌類の子実体、枯死木の表面などの微小生息場所まで広がっている。樹洞内の水たまり（ファイトテルマータ）もユニークなハビタットとして利用されている（7 章）。枯死材が種の宝庫であることを実感させられる章である。8 章は枯死木のサイズ、9 章は周辺環境の観点から構造の多様性を解説している。

“組成の多様性”は 10 章で依存性生物の進化を、11 章では著者たちのホームグランドである北欧を中心に多様性を定量的に評価している。現在みられる様々な分類群にまたがる依存性生物の主要な系統群が、被子植物群の適応放散期とほぼ同期に出現している。たとえば、シロアリの科の主要な放散が約 1 億年から 1 億 5 千年前の白亜紀初期に起こり、先祖的なセルロースの消化を促進する腸管内共生者（原生生物）の助けを借りた食性タイプから、原生生物の共生者は失われ、真菌類の栽培、有機物が豊富な土壌での腐植食、真の土壌食、そして腐朽木や着生植物、葉リター食といった、さまざまな食性タ

イプへと多様化している。1900 年代初めにはほとんどの種の記載が終えた北欧地域において、森林生物全体の 20-25％が枯死木依存性種で、担子菌では全体の 86％が絶対的枯死木依存種という数値には説得力がある。

“多様性の保全と管理”の思想は、Harmon（2001）に基づいている。すなわち、これからの森林管理は、木材生産のため管理である造林（Silviculture）と枯死木のための管理である枯死木生産（Morticulture）を共同して行うべきで（13 章）、枯死材依存性種の保全にはメタ個体群保全の取り組みが必要と解説している（14 章）。森林劣化・減少および枯死木をも収穫対象とする状況下において、枯死木が現状維持されてもすでに絶滅への道を歩んでいる、すなわち絶滅の負債をすでに多く抱えているであろう（15 章）。保全対象は森林だけでなく、農耕地や都市の緑地も含まれる。16 章ではそこでの枯死材管理法についてフローチャートを使って具体的に示している。枯死材保全に熱心に取り組んできた北欧でさえ、近年急速に消失しつつある。この現実を前に、著者たちがやや自嘲的に“木を見て森を見なかったのではないか”と語っているのが重い（17 章）。

この本には全体で 1357 編の論文リストが掲載されている。80 年初頭のものは年間 10 編程度であるが現在では 100 編近い。この分野の研究が活発化し情報が増えたことは歓迎すべきことであるが、一方でこれらをリファーするのは大変だな！森に出かける時間が無くなるのではないかと余計な心配をしている。その意味からも、これまでの研究成果をまとめてくれたこの本の存在はありがたい。先に示した北欧の例ではないが、保全対象なくして保全はありえない。情報量がうなぎ上りに増えつつある中で、自然との直接対話を科学の基本姿勢にしたいものだと改めて感じている。

翻訳者の二人は、森林微生物生態学、森林保護学を専門とし、多数の論文を発表している若手研究者である。よくこなれた日本語に訳されており、多様な分類群の種名に和名を添え、要所には訳者注を入れているのがありがたい。関連した本として「森林生態系の落葉分解と腐植形成」（B. Berg & C. McClaugherty、大園享司訳：シュプリンガー・フェラーク東京出版）、「森のバランス」（森林立地学会編：東海大学出版会）などがある。

（鹿児島大学　米田　健）

小倉紀雄・竹村公太郎・谷田一三・松田芳夫 編（2014）「水辺と人の環境学」（上・中・下）、朝倉書店、ISBN: 978-4-254-18043-5 C3040、各巻定価 3500 円（税抜）

上・中・下の 3 巻からなる川と水辺に関する「環境学」の本が出版された。編者は異色の取り合わせで、河川の水質、物質循環が専門の小倉紀雄氏、川の底生動物に関する生態や分類に詳しい谷田一三氏、そして河川行政に精通し、国土交通省（もしくは旧建設省）河川局長を経験した竹村公太郎氏、松田芳夫氏の 2 名を加えた 4 名である。執筆者は生物学や生態学の研究者はもちろんのこと、自然地理学、水産学、土木工学、森林学など多方面にわたる。これだけ多くの著者が参画した理由は、この本の主題である環境学にあると思う。

環境学を定義することは難しい。理由は、きわめて広い分野を包括する新しい学問体系であり、人と自然のあり方とその問題解決に向けた総合的、学際的なアプローチを必要とするからである。多くの学問分野が細分化されることによって発展した流れとは逆に、これまで得られた様々な知識を総合化することによって、新たな学問体系を提示しようとする意気込みがこの本にも感じられる。そうした意味では、地理学や生態学も同様な流れを持っているし、水産学や土木工学、森林学などは、現在起こっている環境問題にいかに対処するか、その技術や制度が問われてきた。多分、これら自然科学系に法学、社会・経済学、そして歴史観が加われば、社会的側面を含めた環境学が整うように思われる。この本の中では、河川行政に携わってきた著者らが、この役割を担っていると思われる。

この本が 1 巻ではなく、3 巻に分冊されている理由は、その内容の豊富さもあるが、基本的には上・中・下巻が、それぞれ流域の上流－水源地域、中流－扇状地・後背湿地帯、そして下流－河口・海岸域に対応しているためである。一方で、水系一貫で知られるように、河川で発生する様々な現象は、上中下流を通じて伝播する。そのため、この本の中でも、自然現象、社会的背景の幾つかは、2 つもしくは 3 つの区間にまたがる内容になっており、流域内容の多くは、上巻で解説されている。また各巻は、まず河川・水辺の地理や気候、水循環から始まり、各区間を代表する生態系の構造とダイナミズム、そして生息する生物群集の特徴が解説され、最後に川と人間社会とのつながりが述べられている。

上巻Ⅰ部では、まず日本の川の地形や気候、水文の特徴、河川生態系の縦断的連続性や攪乱、食物連鎖など、基礎的概念が説明され、その後、上流域生態系の特徴について述べられている。上流域の内容構成はやや整理が必要である。川の底生動物や魚類、渓畔林、砂防ダムや貯水ダム等の人為的影響が、ある節では生息地やその改変をテーマに、ある節では種をテーマに解説されているため、さまざまな箇所に散在する結果となっている。このため、読者は全体像が見えづらく、少々混乱すると思われる。また、異なる分担著者による内容の重複も認められる。Ⅱ部の人間社会とのつながりでは、上流域の生態系に多大な影響を与えてきた砂防事業と森林管理について、なぜ水源地流域で実施しなければならないのか、どんな構造物が何の目的で設置されてきたのかなど、この分野に疎い読者もその概要を知ることができる。私が物足りなかったのは、上巻のⅠ部とⅡ部が独立しているように感じてしまう点である。森林管理と砂防とのつながり、そしてこれらの人為が源流域生態系に与えた影響について、Ⅰ部にいくらか散見されるが、その全体像を歴史的背景も入れて解説してほしかった。人と自然あり方は環境学の原点であり、この本の要であると思われるからである。

中巻は、平野が開け、人間の土地利用が発達した扇状地と沖積低地が舞台であり、国土交通省が支援してきた「河川生態学術研究会」の成果が、所々で紹介されている。

Ⅰ部ではまず、地形や水資源の利用などが解説されたのち、近年、全国で顕著になっている河床低下と氾濫原の樹林化、礫河原の減少が詳しく述べられている。その後、中流域を特徴づける生物相について解説されているのであるが、ここでも少し整理が必要だと思われる。ヒゲナガカワトビケラなど個別種の解説後、中流域の底生動物群集の特徴と工事の影響が続く。侵略的外来種であるアレチウリが他の固有種と同列で解説された後、外来生物の章があり、植物ではハリエンジュが紹介されている。Ⅱ部では、国土保全上の最重要課題であった治水と農業開発の歴史、河川工学の用語や施設の解説が加えられている。さらに、河川行政の大きな転換として、河川法の改正（治水・利水に加えて、環境保全が管理目的に加わる）と自然再生の歩みが説明されている。河川生態系の構造と機能、ハビタットなどの概念が整理され、日本で行われている蛇行、礫河原、湿地・氾濫原の自然再生事業についてその特徴がわかり易くまとめられており、中巻におけるⅠ部とⅡ部をつなげる役割を果たしている。

下巻は、河口域がその舞台であり、地形的には三角州が当てはまる。世界や日本の大都市もこの地域に発達し、河川は大きな人為的改変を受けてきた。生物では陸と海を回遊する魚類や甲殻類、ヨシ原の鳥類、汽水域の貝類、干潟の魚類や鳥類など、様々な生物種が紹介されていて、それぞれが興味深い生活史を持っていることがわかる。都市部が発達する地域のためか、水俣病に代表される公害問題など、人間社会と川や干潟、海岸とのつながりに多くのページが割かれ、河川法の制定から改正、多目的ダム事業、都市型水害と総合治水事業への展開についても述べられている。特に、都市における舟運の歴史と重要性が江戸時代から詳述され、読み応えがあると同時に、人と川とが日常を通じてつながっていた過去の様子がよく理解できる。

以上、概観したように、3巻を通じて、源流域から河口域までの河川生態系の構造と機能、ダイナミズムに関する概念整理と生物相の特徴のみならず、それを利用し、改変してきた人間の営みが、歴史観と社会史を重視して述べられている。各巻、もしくは章や節ごとに読んでも理解できるが、自然と社会の流域を通じたつながりを理解するためには、全体を通読することをお勧めする。ただし、読者が、川の環境問題について深く理解するためには、この本で紹介されている様々な生物の生活史、人の社会史、そして防災技術の功罪を自分の頭の中でつなげて再構築する必要がある。その意味で、この本は、平易な本とは言いがたいが、川に関する知識を広げ、人と自然のあり方を考えさせてくれる良書である。

（北海道大学　中村太士）

桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之（編著）『オホーツクの生態系とその保全』北海道大学出版会　pp.483（2013）　ISBN:978-4-8329-8208-6　¥12000＋税

本書は、2009年と2011年に行われた「オホーツク生態系保全・日露協力シンポジウム」の結果を、一般向けに書き直したもので、日本とロシアの科学者が執筆している。ロシアの研究は、ロシア語の論文で書かれることが多く、隣国の自然とその研究であっても、日本人に知られることは少ない。その意味から言っても、本書はロシアの研究者の研究内容を日本語で読める貴重な資料ということができる。

日露の政府間交渉によって、2009年に「日露生態系保全協力プログラム」が成立し、日露間の研究協力がようやく動き始めた最初の成果が本書となって現れた。

本書のコンテンツは、大きく4つのパートを含んでいる。最初に、(1) 海洋物理化学データを基礎としたオホーツク海の海洋循環と物質循環について書かれている。このあと、(2) オホーツク海を中心とした漁業資源の動向、(3) 海生のほ乳類・海鳥・陸生哺乳類の研究の現状、(4) 今後の共同研究とその課題、と続く。ただし、本書の章立ては (3) の部分を4つに分割しており、全部で8章になっている。

本書を手にとって最初に驚いたのは、その製本の豪華さと堅固さ、厚さであった。上質の厚手の紙を用い、図表のほとんどがカラーで印刷されている。そのせいもあって、大判の484ページで、厚さ約3 cmもある。机の飾りにもなりそうな堂々とした体裁だ。売価12000円＋税という価格では、興味をもっても一般の人にとっては高嶺の花かもしれない。図書館などで手にするくらいになるのではないか。制作する側もあまり購入する人のことを考えたものとは思われない。

オホーツク海といえば、世界でも最も低緯度で流氷が見られることで、つとに有名である。この流氷の形成が、オホーツク海の物理化学的現象に大きな特徴を与えていることを、豊富なデータに基づいて解き明かすのが、第一のパートである（第1章　流氷の海をめぐる海洋物理化学）。近年になって幾多の困難を乗り越えて行われた日露の共同観測により、オホーツク海全域の海洋観測データが飛躍的に増加した。その結果、オホーツク海の流氷形成のメカニズムとその結果起こる東樺太海流、中層流が、アムール川からの溶存哲をオホーツク海に高生産性をもたらしているプロセスを明らかにした。それはさらに、オホーツク海から北太平洋に流れ出し、親潮に大きな影響を与えて、日本の東北域の高生産性を支えていることまでも明らかにしてきた。中の1節を執筆した白岩は、そのシステムをアムール・オホーツクシステムと名付け、巨大魚附林と称した。これらの研究は、総合地球環境研究所のプロジェクトとして、北海道大学低温研究所とロシア極東海洋気象研究所の共同研究として行われたものが中心になっている。

本書を読み始める前に、評者が予想していたことは、研究の内容をある程度知っているにもかかわらず、堅苦しい論文の記述が続き、専門外の人間は途中で投げ出したくなるに違いないという思いであった。しかし、その予想はまったく杞憂に終わった。各節ごとに違った著者で書かれているのだが、その節は、図表を除くと本文が3～4ページ程度で書かれており、一気に読むのに困ることがない。開き始める前に終わってしまうという風に、簡潔、明快にまとめられており、専門外の人間にとっても、きわめてわかりやすい。この編集方針は最後まで一

貫しており、どの章もわかりやすく簡潔に書かれており、読み飽きて放り出すことがない。

第2のパートは、「第II章　海洋生態系と魚類・漁業」である。ここでは生産性の高いオホーツク海での漁業の歴史と現状が、さまざまな魚種や観点から多くの著者によって書かれている。ただ、その視点は「持続的漁業」からであって、「持続的環境」ではないところに、評者は居心地の悪さを感じた。ロシア側の研究者らが環境や資源の持続性に重点を置いた内容であるのに比し、日本側の研究者が「持続的漁業」に重点を置いているのが、北方四島を含む千島列島やオホーツク海北部のシホテリアン保護区など、海洋保護区を設定してきたロシアの政策と漁業1点張りの日本の水産研究者の差を覗かせているように思われたのは、評者のひが目であろうか。知床世界自然遺産指定を奇貨として進展した知床の漁業資源管理が唯一希望を覗かせる日本の事例とは少し寂しい。

第3のパートは、「III章　海生哺乳類I鯨類」、「IV章　同II　トド・アザラシ類」、「V章　海鳥と希少猛禽類」、「VI章　ヒグマとコウモリ類」の4章が含まれている。このパートは、それまでの内容と異なり、オホーツク海での重要な個々の動物種について、これまでの研究結果をまとめたものである。それぞれの動物についての知識があまりない評者にとっては、新しい知識が山盛りで、読んでいて楽しい。しかし、前2パートに比べて、研究者（著者）の個々の動物種への思い入れが深く、保全についての強調はあるのだが、オホーツク海の生態系の視点が希薄になってしまうのは残念だ。陸上生態系の頂点にいると考えられるヒグマの研究で、陸と海のつながりが強調されているのが救いであった。オホーツク海の生態系のスケールで考えていけば、第1のパートとの連関で見えてくるものがあるのではないだろうか。ただ、これらの研究の多くがNGOを中心とした北方四島の日露共同研究を基盤としていることは注意しなければならない。困難を克服して行われてきた共同調査の限界は当然あるだろう。

第4のパートは、保護区管理と今後の日露共同研究の必要性と期待が述べられている。「VII章　生物多様性のためのデータベース作りと保護区管理」では、知床とシホテリアンという二つの保護区の管理状況が書かれているが、この二つの保護区を比べてみる限り、もっともうまくいっていると言われる知床世界遺産の保護区管理でさえも、日本の保護行政の遅れを際立たせる事例にしか見えないのは、残念なことである。「VII章　ロシアとの共同研究と今後の課題」では、これまで行われてきた日露の各レベルでの共同調査・研究の意義が強調されている。アムール・オホーツクプロジェクトの研究成果の上に結成された、日露中モ四カ国によるアムール・オホーツクコンソーシアムの重要性は、本書全体を読んで、再確認できた。

同時に、強調したいのは、NGOを中心として、日露ビザ無し交流を利用した地道な日露共同研究が、一定の成果を上げていることである。北方四島は日露の領土問題の政治的な駆け引きで、調査そのものも困難な情勢にあるが、NGOらの努力で、少しずつ共同研究の成果が積み上げられてきた。日露両政府が「日露生態系保全協力プロジェクト」を合意したことは、これらNGOらの地道な努力のたまものでもあった。この日露プロジェクトを大きく発展させ、オホーツク海をめぐる各国の国境を越えた環境問題への取組が今こそ求められている。

これら日露の共同研究やプロジェクトは、始まったばかりである。日露の政治状況に振り回されながらも、本書はオホーツク海をめぐる日露の共同研究・プロジェクトの現状をまとめた最初のものであり、今後の研究と環境政策への良い影響をおおいに期待させるものと評価したい。とくに地球温暖化が、海氷の生産低下を引き起こし、中層高塩低温水の減少と陸上からの溶存鉄流入の低下を経て、オホーツク海の生態系を大きく崩壊させる可能性を研究結果が指し示していることは、この研究領域が日本の辺境のできごとではなく、喫緊の課題であることを明瞭に物語っている。

オホーツク海の生態系が持つ重要性とその保全における危機的状況を一般の人にも知ってもらうために、本書はもっと読まれるべきだと思うのだが、前述したように、価格が高すぎる。これでは一般の人は買って読もうとは思わないだろう。紙質や装丁、カラー印刷など多少の質を落としても、もっと廉価で販売できる普及版が欲しい。

なお、293ページ6行目に「オジロワシ」と書かれているが、前後の文脈からしてもこれは「オオワシ」の間違いだろう。

（向井　宏）

樋口広芳著「鳥・人・自然　いのちのにぎわいを求めて」（2013）254pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-063336-9　定価2800円（税別）

日本の鳥類界を牽引する鳥類学者の本が出版された。書名からは、樋口氏のこれまでの研究の総まとめのような印象を受ける。

「はじめに」では、鳥には存在感があり、景色を一変させる力を持っているということと、鳥への関心はいつ、どこにいても私の中にあった、という部分が特に心に残った。これらの記述から、鳥だけを見ているのではないこと、日常の生活でも鳥に関心を持つことの大切さがうかがい知れる。たとえば、「何気ない観察から、あるいは新聞やテレビの報道から、重要な研究の糸口をつかむことがある」と書かれているのは、常日頃から研究対象とそれを取り巻く環境にも目を向けることの重要性を示しているといえるであろう。それでは、内容を見ていこう。

本書は4部で構成されている。第1部は「鳥との一期一会」、第2部は「鳥のくらしと人のくらし」、第3部は「世界の自然をつなぐ渡り鳥」、そして第4部の「鳥・人・自然」である。

第1部では近年、上野の不忍池の観察されている人の手に乗るスズメを始め、東京大学の本郷キャンパスに初夏に立ち寄った夏鳥との出合い、トカラ列島でイイジマムシクイやアカコッコを観察したことなど、著者と鳥た

ちの思い出深い出合いが紹介されている。

第 2 部の多くはカラス類の食性と、三宅島の鳥類について焦点を当てている。樋口氏の一連の研究成果をわかりやすく解説しているのだ。貝や木の実を空中から落として割って食べる習性や、屋外の手洗い場の石鹸や火のついたロウソクを持ち去る行動から、カラス類が食文化を持つ理由へと考察を深めていく。研究をさらに進めるための視点も盛り込まれている。また、三宅島でおこなわれている研究から、近縁種がいないことによって生態や行動が変化することが示唆されている。その例として、ホトトギスの托卵習性が挙げられており、ほかのカッコウ類が繁殖していないことで宿主の利用範囲が拡がっているという。エナガが生息していない三宅島では、シジュウカラは「リリリ」という声を出さないと書かれており、なるほどと思った。

渡り鳥を題材にして、ダイナミックで興味深い展開になっているのは第 3 部だ。衛星追跡によって地球を旅する鳥たちに迫る。冬にカモ類を見て、繁殖地はどこだろうかとか、山でサシバやハチクマに出会って、越冬地はどんなところだろうと思うのは、多くの鳥好きに共通することだろう。まずは、マガモとオナガガモの春の渡り。越冬地である日本から繁殖地への渡りは、マガモは日本海を越えて行くものが多いが、渡りの経路は同じ越冬地から出発した個体の間でかなり異なっている。オナガガモは本州を北上し、北海道を経由して繁殖地に向かう。そして、少なくとも 1200 km をノンストップで海上飛行をおこなっている個体がいるという。

タカ類ではサシバとハチクマを衛星追跡しているが、ここではハチクマの例を紹介しよう。鳥の渡り衛星追跡の公開プロジェクト、「ハチクマプロジェクト」。このプロジェクトはウェブサイトを通して、追跡中のハチクマの状況を多くの人々に公開している。2012 年の秋の渡り、そして 2013 年の春の渡りの状況は Facebook からも発信されており、私はその一部始終を拝見していた。鳥の渡りに関心のある者にとって、ある鳥がどのようなルートで越冬地や繁殖地に行くのか、どんな場所を通過して行くのか、それをほぼリアルタイムで見られるのは至上の喜びである。第 3 部の第 9 章にある「ウェブを見ながら密漁について考えた」という孫可黄さんの、胸の熱くなる文章はぜひ読んでいただきたい。

第 4 部はこれまでを振り返り、大学学部 3 年生から東京大学を定年退職するまでの 40 年あまりの樋口氏の研究生活がまとめられている。また、エルンスト・マイヤー教授から強い影響を受けたという箇所では、すばらしい本と出合うことの大切さが記されている。「官僚の渡り」と「鳥の渡り」の混同についての指摘は、強く共感した。

「おわりに」でも書かれているが、本書を回顧録にするつもりはないという氏の想いの通り、鳥類の多様な生態やその不思議に触れることのできる本である。

（都留文科大学　西教生）

京都大学生態学研究センターニュース
Center for Ecological Research NEWS

京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200（代表），Fax : (077) 549-8201
センター長　中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp

2015（平成 27）年度 共同研究公募のお知らせ

京都大学生態学研究センターは、2010（平成 22）年度から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として活動してまいりました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や研究集会・ワークショップなどの公募を毎年行っています。**2015（平成 27）年度の公募につきましては 11 月上旬に開始の予定です。**詳しくは、その時期のセンターホームページをご参照ください。2015 年度の公募は 2015 年 1 月 31 日が締め切り予定です。

2014 年度開催の研究集会・ワークショップ

『国際ホソガ科蛾類シンポジウム 』
開催日：2014 年 9 月 26 ～ 28 日　開催地：和歌山県東牟婁郡古座川町月野瀬 881-1 ぼたん荘
問い合せ先：川北 篤（京都大学生態学研究センター・准教授）（E-mail : kawakita@ecology.kyoto-u.ac.jp）　※終了しました。

『日本長期生態学研究ネットワーク・オールサイエンティストミーティング 2014 』
開催日：2014 年 9 月 28 ～ 30 日　開催地：京都大学芦生演習林
問い合せ先：日浦 勉（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・教授）（E-mail : hiura@fsc.hokudai.ac.jp）　※ 終了しました。

『大規模生物現象研究会　ー制御／非制御環境下における生物形質の分布ー』
開催日：2014 年 10 月 24 ～ 25 日　開催地：キャンパスプラザ京都
問い合せ先：福田和弘（大阪府立大学工学研究科・准教授）（E-mail : fukuda@bioinfo.osakafu-u.ac.jp）

『2014 年度勇魚会シンポジウム「海棲哺乳類の分布・資源・保全」』
開催日：2014 年 12 月 6 ～ 7 日　開催地：京都大学理学部北部構内
問い合せ先：吉田弥生（京都大学野生動物研究センター・研究員）（E-mail : yyoshida@wrc.kyoto-u.ac.jp）

『樹木の乾燥耐性機構解明に向けた生理と形態からのアプローチ 』
開催日：2015 年 2 月 20 ～ 21 日　開催地：京都大学生態学研究センター
問い合せ先：小笠真由美（東京大学大学院新領域創成科学研究科・学振特別研究員）（E-mail : ogasa@nenv.k.u-tokyo.ac.jp）

『越境の微生物学：Microbes beyond borders』
開催日：未定　開催地：京都大学生態学研究センター
問い合せ先：高尾祥丈（福井県立大学海洋生物資源学部・講師）（E-mail : takyoshi@fpu.ac.jp）

『若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曽川』
開催日：2014 年 8 月 9 ～ 15 日　開催地：京都大学理学部附属木曽生物学研究所
問い合せ先：奥田 昇（京都大学生態学研究センター・准教授）（E-mail : nokuda@ecology.kyoto-u.ac.jp）　※ 終了しました。

『安定同位体生態学ワークショップ 2014 』
開催日：2014 年 8 月 30 ～ 9 月 5 日　開催地：京都大学生態学研究センター
問い合せ先：陀安一郎（京都大学生態学研究センター・准教授）（E-mail : tayasu@ecology.kyoto-u.ac.jp）　※ 終了しました。

『RAD-Seq 解析ワークショップ』
開催日：2014 年 10 月 29 ～ 30 日　開催地：京都大学生態学研究センター
問い合せ先：永野 惇（京都大学生態学研究センター・連携研究者）（E-mail : anagano@gr.bot.kyoto-u.ac.jp）

『進化と生態の階層間相互作用ダイナミクス：生態学のリストラ』
開催日：2014 年 12 月 6 ～ 7 日　開催地：京都大学生態学研究センター
問い合せ先：辻 和希（琉球大学農学部・教授）（E-mail : tsujik@agr.u-ryukyu.ac.jp）

センター関係者の動き

1 ）Hajanirina Fanomezantsoa Rakotomanana 氏—アンタナナリポ大学（マダガスカル）・教授が、招へい研究員（客員教授）として 9 月 1 日から 11 月 30 日の予定で滞在中です。

◆会費
会費は前納制で、学会の会計年度は 1 月から 12 月までです。
新年度の会費は 12 月に請求をします。会費未納者に対しては 6 月、9 月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256　口座名：一般社団法人日本生態学会

退会する際は前年 12 月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトに申込フォーム有り）。
会費を 1 年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2 年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費 * （保全誌購読者 **）	大会発表	総会・委員 （選挙・被選挙権）
正会員（一般）	11000 円 （13000 円）	○	○
正会員（学生）	8000 円 （10000 円）	○	○
団体会員	22000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費･大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧下さい。
**非会員の方の保全誌定期購読料は年額 5000 円です。
なお、保全誌は発行後 2 年間、オンラインアクセスができません

【論文投稿の権利】
・日本生態学会誌　　正会員のみ有
・保全生態学研究　　正会員・保全誌定期購読者のみ有
・Ecological Research　　投稿権利は会員に限定されません

【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】
・日本生態学会誌　　600 円
・Ecological Research　　900 円
既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年 10 月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。
新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

地区会費
正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

・北海道地区（200 円）：北海道
・東北地区（600 円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
・関東地区（400 円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
・中部地区（0 円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
・近畿地区（400 円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
・中・四国地区（400 円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
・九州地区（700 円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県
*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：日本生態学会事務局
〒 603-8148　京都市北区小山西花池町 1-8
Tel&Fax 075-384-0250　　http://www.esj.ne.jp/
※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。